

代々木病院の理念

ヒューマニズムにもと づく医療・介護の実践

くらしと健康

発行 医療法人財団 東京勤労者医療会 1部60円

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷1-30-7

TEL 03(3404)7661

E-mail address yo_sosiki@tokyo-kinikai.com

友の会会員は会費に購読料がふくまれています。

在宅で暮らすことを支える

—在宅支援の病院として—



医師の相澤秀樹と多くの職員が共感しました。

「地域まるごと健康づくり」をめざす

代々木病院は、2012年度も引き続き、「在宅支援の病院」として、患者さんが住み慣れた場所で自分らしい生活を送れるよう支援していきます。この方針を職員が自分の言葉で受けとめ、自分の言葉で話してみようと全職員集会を開催しました。

重点課題は

代々木病院は、①リハビリテーションと在宅支援を柱とする都心部において、存在感のある病院、②介護事業を有し、さらには医療、介護、福祉のネットワークの中で、総合的な在宅支援をすることができると、③地域の保健予防活動に貢献する病院をめざしていきます。

重点課題は

① 訪問診療・訪問リハ・通所リハの強化と、訪問看護ステーション及び訪問介護事業所・地域包括センターとの連携で在宅医療の強化をしていきます。② リハビリテーションを必要とする患者さんに、必要な訓練を提供しADLの改善、早期回復・在宅復帰を支援します。③ 回復期病棟では休日・祭日は休日・祭日・土曜日、継続したりハを提供します。④ 一般病棟、回復期病棟、障害者施設病棟それぞれの機能を適切に発揮していきます。栄養サポートチーム、摂食機能療法、口腔ケアなど他職種と連携したチームでの医療活動をすす

全職員集会

2月15日に88人が参加した全職員集会の第一部の講演では、リハビリ医の相澤秀樹医師が、「リハビリは機能回復訓練だけではなく、全人的な回復であり、その人らしく生きるために生活を支援することであり、リハビリは、様々なスタッフの連携こそ大切である」と述べ、多くの参加者が在宅を支援する職員として共感しました。

全職員集会

連携して在宅を支援している立場で、ケアマネージャー、通所リハビリ、訪問看護ステーション、訪問診療部、3階病棟より発言がありました。その中の発言で坂村ケアマネージャーは、「代々木病院のように、これだけ在宅に向けてのサービス体制のある病院も、院内に居宅があるのも本当にめずらしい」「病院・訪問診療・薬局・通所リハ・訪問看護、訪問歯科とも密な連携が図れるのも大きな強みで、利用者さんにとって大きなメリット」と説明、在宅の患者さんを支えるために、グループ内も含め、地域のサービス事業所とのより積極的な連携を、さらに強めていきたいと話しました。

通所リハビリの矢野主任は「通所リハビリを利用される方は、在宅からリハビリに通い、『もう少しリハビリを続けたい』『今の状態を維持したい』『人とのつながりを持ってほしい』など目標は様々ですが、代々木病院に期待してください」と述べて、通所リハビリは地域に根ざした医療としての役割が大きき、訪問看護、訪問リハ、訪問診療部はも

ちろん、区内の事業所も力を合わせて、この地域の方たちのために一緒に支えていきたい」と現場から発表しました。

また、代々木訪問看護ステーションの小林所長は「訪問看護は、医師の指示で、お家にいらっしゃる患者さんのお宅にお邪魔して、看護をします。代々木病院は病床を持っていないことで大変強く、また入院しても、在宅復帰に向けて、カンファレンスも開けるので、地域に出ると友の会の人など病院の事を考えてくれている。期待に応えたい」「病棟では(患者さんを)生かされました。

第2部では、院内9つの会場で第1部の講演などを聞いて活者としていくチーム医療をしていきたい」「リハの理念を初めて聞いて感動した。学生さんにも伝えたい。」と

思いを込め募金をたくす

沖縄だけの問題ではない



比嘉事務局長(左)に募金を渡す富田看護師(右)

「私たちも一緒に頑張らなくてはいけない」1月に普天間基地移設反対の座り込みが続く辺野古の支援・連帯行動に参加した、富田時子看護師と日堂千恵看護師は、今後も支援することを明らかにしました。

そこで代々木病院の各職場に募金をつのり、集まった62,000円を4月20日全日本民連で、富田看護師が沖縄民連の比嘉事務局長に手渡しました。

比嘉事務局長は「今は、米軍基地問題だけではなく、離島の自衛隊の問題もあること、沖縄から日本・沖縄の問題を発信できて良かった」と述べました。今後は署名活動を広めて引き続き支援をしていきます。

入職1年目の職員も一緒に活発に話し合いました。



千駄の萱

姉の赤ちゃん、最近首が座り、笑顔も見せるようになった。

小さな身体で世界を吸収して日々人間らしくなっていく。可愛いらしい仕草の一つに家族中がお祭り騒ぎである。6つ上のお兄ちゃんが初めての妹に戸惑いながら優しくあやす姿も微笑ましく、親としてではないが「子は宝」の意味を実感している▼その姉に話を聞くと、都内に住んでいても原発事故の影響による子育てへの不安が大きいと言う。水や野菜の産地には余計に気を遣い、安全のために食費もかさむ。近所の公園がホットスポットと言われ、外で遊ばせたいのに外出には不安がつきまとう。何をすれば安心出来るのか、いつになれば解決するのかわからない。放射能の先の見えない恐怖は続く。新しいエネルギーへの転換など原子力に頼らない社会が模索され始めている反面、原発推進の圧力もなお強い▼宝物である子供達のために、国や電力会社がこの問題に真摯に向き合い、本当に安全なエネルギーの供給に力を尽くすことを望む。(ゆ)